

## 地面に落ちたタカノツメの実を採食したコルリ

青山 茂<sup>1)\*</sup>Foraging behavior on fruit of *Evodiopanax innovans*  
by the Siberian Blue Robin, *Larvivora cyane*, observed on the groundShigeru AOYAMA<sup>1)\*</sup>

## 要 旨

2023年9月に神戸市においてコルリ *Larvivora cyane* 幼鳥雄の地上での行動を7日、合計44分、動画撮影した。再生したところ、本種が移動しながら嘴を使う行動が153回観察され、うち139回は何かをついばむ行動であった。残り14回は落葉除去行動であった。ついばみ行動の対象はほとんど確認できなかったが、その中にタカノツメ *Evodiopanax innovans* の実を啜り上げる行動を4例と素早く歩行しながらついばむ行動を1例確認した。これまで本種は昆虫食性と報告されてきたが、本研究では幼鳥雄のおそらく1個体だけの観察ではあるが、本種が果実食も行うことが強く示唆された。ついばみ以外の行動として、幼鳥雄は地面に横たわる枝上でときどき静止した(最長204秒)。他にも活動の際に、すぼめるか軽く開いた尾を頻りに振った。ときには尾を大きく広げて激しく振った。

**キーワード:** コルリ, 採食行動, タカノツメ, 動画撮影.

(2024年5月30日受付, 2024年9月6日受理, 2025年1月31日発行)

## はじめに

コルリ *Larvivora cyane* (Pallas, 1776)はスズメ目ヒタキ科に属し(日本鳥学会 2023), 全長約14cmになる(清棲, 1952; 北野, 1999; 高野, 2007; 叶内ほか, 2011)。夏季にユーラシア大陸東部や日本で繁殖し, 冬季にはインドシナ半島やインドネシアなどで越冬する。日本での繁殖地は, 主に本州中部以北, 北海道である(中村・中村, 1995)。一般に本種は昆虫食性(insectivorous)とされ, 主に林床や地上近くで昆虫, クモ, ミミズなどを採食する(山階, 1941; 清棲, 1952; 宋ほか, 1983; 中村・中村, 1995; 叶内ほか, 2011; 叶内, 2017; Gassah and Ismavel, 2019)。他にも, 日本および世界の各地で本種の出現についての報告は多いが, 外部形態や尾の振りによる種の同定に関する記述等がほとんどで, 採食対象に関する記述は見当たらない(Rountree, 1977; Foster, 2006; 佐藤・岡井, 2007; Deshmukh, 2011; Mohsanin et al., 2014; Clarke et al.,

2016; 北沢・青木, 2018)。兵庫県版レッドリスト2013(鳥類)では兵庫県内において絶滅の危機が増大している種など, 極力生息環境などの保全が必要な種としてBランクに位置づけられている(兵庫県環境部自然鳥獣共生課, 2013)。神戸市周辺には春に北へ渡る途中で, 秋に南へ渡る途中で, それぞれ中継地として短期間飛来する(北野, 1999)。秋に見られる個体はその年生まれの幼鳥(若鳥)が多く, ハイキング道の地上でよく採餌している(北野, 1999; 青山, 2024)。青山(2024)は, 渡りの時期に神戸市周辺で見られた本種の行動を報告した。それによると, 野鳥撮影者が多くいた公園では本種をおびき出すため, 人為的にミルワームが置かれていたと述べている。それ以外に本種の採食対象に関する記述はない。本研究では, 秋の飛来時期に地上での本種の採食行動を動画で撮影し, タカノツメ *Evodiopanax innovans* の実の採食を強く示唆する観察がなされたので報告する。

<sup>1)</sup> 兵庫県立人と自然の博物館 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘6丁目

\* Corresponding author. E-mail: pekkon26@yahoo.co.jp

## 材料と方法

コルリの行動調査は、2023年9月2日～4日と9月14日～30日の間に合計18日、神戸市北区山田町下谷上に所在する神戸市立森林植物園(以下「森林植物園」)で実施した。本種を見つける方法として、青山(2024)と同じ1カ所の観察場所で本種の出現を1～3時間待った(表1)。観察場所は散策路の一角にあり、周りには樹木が繁茂していた。樹木が生育する地面(以下「植栽部分」)には落葉が堆積し、散策路の植栽部分際にも一部で落葉が堆積していた。本種が出現した場合には視認できる限りデジタルカメラ(キャノン、PowerShot SX70 HS)で動画撮影(記録サイズ:標準 1920 x 1080, 59.94fps)した。撮影の際は、本種が森林の地上付近のやや薄暗いところで活動することが多いことや(田村・上田, 2001)、望遠で拡大しすぎると動き出した際にファインダーで追跡できないので、ある程度広角で撮影した。また、ファイル容量が大きくなりすぎないように動画撮影ボタンを適宜切り、すぐに入れなおした。撮影動画をMicrosoft フォト for Windows を用いて静止画として見直した。ただし、動きが速いときは静止画にしても被写体が流れていた。特に重要なシーンについてはMicrosoft clipchamp を用いて0.1倍速のスローモーションでも見直した。辞書等(例えば「Weblio 国語辞典」: <https://www.weblio.jp/>)によると、鳥類が嘴を使ってつつくようにして餌を食べる様子を「ついでむ」という。本研究の「ついでむ」も同様の様子に対して使用した。動画を見直す際に先ず嘴を使用する行動を計数した。同じ餌に対して複数回ついでんだ場合、そのまま複数回として計数した。次にどのような物をついでむのか、切り取った静止画をパソコン画面上で可能な範囲に拡大・トリミングして調べた。ついでむ対象を嘴でいったん保持してからのみ込む場合、餌を「啜る」、「のみ込む」と段階に分けて表現した。確実にのみ込むのを確認できた場合を「採食する」と表現した。

さらに、ついでむ以外の行動についても動画再生時に調べた。

## 結 果

### コルリの出現状況

森林植物園における合計18日の調査のうち本種を確認できたのは9月2日、4日、15日～19日の合計7日であった(表1)。9月2日と4日には幼鳥雄1羽と少し離れたところに成鳥雄1羽が現れたが、後者を撮影することはできなかった。その他の日には幼鳥雄1羽だけが現れた。9月2日の幼鳥雄は先ず周辺の樹木(タカノツメ)の枝上に現れることが2回あり(図1)、そこから地面に飛び降りた。なお、図1では体色は褐色がかっているが、地面に降りたときには上面が褐色の地色で広範囲に青味がかっており、第一回冬羽の幼鳥雄であると判

断された。9月15日にも同じ樹木の枝に現れることが2回あった。他の日では周辺の地面からホッピングもしくは歩行して現れるか、地上10～20cmを飛翔して現れた。なお、森林植物園によると9月2日～19日の間の最低気温は21.1℃、最高気温は32.9℃であった。

### 地上でのコルリの採食行動

本種が確認できた7日間で合計2627秒(約44分)の動画を撮影した(表1)。1回当りの撮影は4～132秒、1日当りでは54～887秒であった。録画時間中に嘴を使う行動を少なくとも153回確認した。このうち139回は地面をついでむ行動であった。残り14回は落葉除去行動で、そのうち12回は頭を振って嘴で落葉を跳ね飛ばし、2回は嘴で落葉を啜り上げてすぐに落とす。

### コルリのついでむ対象

撮影した動画からは、対象が小さく写り過ぎていることや本種の行動が非常に機敏であることから、何ををついでんだのかはほとんど確認できなかった。ただし、幼鳥雄が地上性のクモを1例とタカノツメの実を5例ついでむのを確認できたので以下に状況を述べる。9月15日、地上性のクモを啜り上げ、1度落としてから再び啜り上げ、そのまま啜っていたが嘴からクモが急に見えなくなった。スローモーションで見てものみ込むところはわかりにくい。採食したと判断した。タカノツメの実については、啜るのを4例とついでむのを1例確認した(図2)。1～3例目までは9月15日にほぼ同じ場所で観察された。1例目は落葉の陰からタカノツメの実を啜り上げたが、クモの場合と同じく嘴から実が急に見えなくなった(図2A)。その後で下を向き、嘴を左右1回ずつ植物で拭いた。2例目も実を啜り上げたが、直後に下を向いたのでのみ込んだのかどうかは確認できなかった(図2B)。1例目、2例目の間隔は6秒であった。3例目(図2C)は1例目の3分後で、後述する静止行動を挟んで行われた。3例目の実の啜り上げでは、直後に背を向けて地面に横たわる枝の上に移動した。その際、嘴の実はなくなっていた。



図1 タカノツメの枝に現れたコルリ幼鳥雄(9月2日;撮影時刻10:16)。



表 1 2023 年に観察されたコルリ幼鳥雄の行動.

観察日(時間)	動画撮影時間	嘴を使用した行動の回数			静止行動の合計時間
		ついでみ	落葉除去	嘴使用行動の合計回数	
9/2 (10:00-12:45)	3分 28 秒	14	0	14	-
9/4 (9:20-12:00)	54 秒	11	0	11	-
9/15 (13:30-16:20)	9分 16 秒	29	9	38	2分 21 秒
9/16 (15:20-16:25)	5分 21 秒	6	0	6	4分 20 秒
9/17(11:40-13:45)	1分 3 秒	4	0	4	-
9/18 (15:00-16:30)	8分 58 秒	18	0	18	1分 47 秒
9/19 (14:20-16:40)	14分 47 秒	57	5	62	5分 4 秒

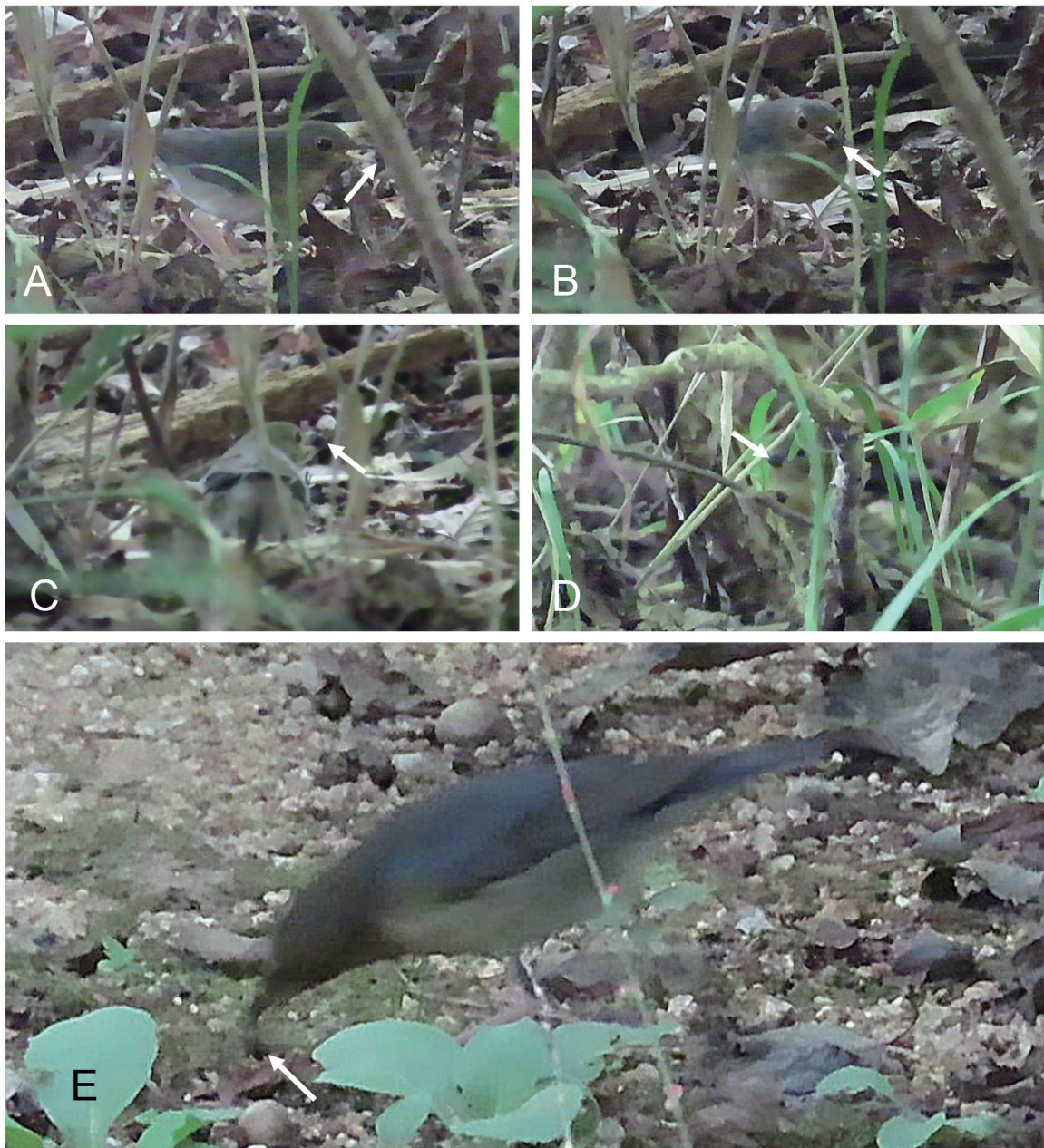


図 2 コルリ幼鳥雄によるタカノツメの実への採食行動. A-D:実を咥え上げた. A:9月15日, 15:57:20(時:分:秒);B:9月15日, 15:57:26;C:9月15日, 16:00:25;D:9月18日, 15:30;E:素早い歩行中に実をついでむ.直後に実が見えなくなった(9月18日, 15:45). 矢印は実を示す.



枝にとまってから、嘴の左右をその枝で1回ずつ拭った。4例目と5例目の観察は9月18日であった。4例目は実を啜えたが直後に下を向いたののみ込んだのかどうかは確認できなかった(図2D)。5例目は散策路に出てきて素早く歩行しながら、タカノツメの実をついばんだ(図2E)。その際、実が見えなくなり、直後に前方に歩行して進んだ地点でさらに何かをついばむ行動を行った。このときの静止画については少し解像度が悪いので拡大して示した。この他により小さな白い物を啜えたまま、啜え直すように嘴を小さく1~2回開け閉めしてのみ込むのを2例確認した。

### ついでみ以外に見られた行動

幼鳥雄は地上に出現後、尾の振りを頻繁に行ないつつ、時々立ち止まりながら移動し、地面をついばんだ。活動の途中で地面に横たわる枝の上等で静止することもあり(表1)、最長の静止は連続204秒であった。静止する場合、眼だけ動かす、あるいは頭部だけ動かすことがあり、眼を閉じて眠ることはなかった。静止中は尾の振りをほとんど行わず、振ったとしてもごく小さな振幅であった。移動の際に見られた通常の尾の振りは、尾をややすぼめるか、軽く開いた状態で行われた。2例だけであるが、尾をいっぱい広げて激しく振る行動が見られた。1例目は上述のクモに対するついでみ行動を行った後、1例目のタカノツメの実を啜え上げる直前に尾羽を広げて3回振った。2例目は植栽部分から散策路に出る際に頭を上げ、尾を激しく振った(図3A, B)。

## 考 察

本種は昆虫やクモなど動物性の餌を採食すると述べられているが、植物性の餌の採食については述べられていない(山階, 1941; 清棲, 1952; 宋ほか, 1983; 中村・中村, 1995; 叶内ほか, 2011)。本研究でも地上性のクモを採食するのが確認された。クモ以外の対象が確認できたケースとして、タカノツメの実をついばむのが5例観察され、4例目まではいったん啜え上げた。1例目は啜え上げた状態から急に見えなくなり、クモが採食さ

れた状況と同じであったので採食したと判断される。さらに1例目と3例目の実を啜えた後で嘴を拭ったことから、採食したときに着いた果汁を拭いた可能性が高い。5例目はついでみ行動を行った一瞬でタカノツメの実が見えなくなった。前述したように青山(2024)では人為的にミルワームが置かれていたことがあったが、そのときの動画を見直したところ本種がついでみ行動を行うと地面に置かれたミルワームが吸い取られるように一瞬で見えなくなることがあった。5例目の状況は、このミルワームを採食した状況と同様であったことから、採食したと判断した。本研究の観察場所では2022年にもコルリの幼鳥雄と雌タイプが少なくとも各1羽ずつ出現し(青山, 2024)、何かをついばんでいたが、何を ついばんでいたのかは不明である。本種は渡りの途中で短期間飛来するが(北野, 1999)、本研究で観察された幼鳥雄が同一個体であったのか、あるいは複数個体が入り替わっていたのかも不明である。ただし、青山(2024)は、2022年9月17日~20日に森林植物園の本研究所と同じ場所に飛来した幼鳥雄がその期間中は同一個体の可能性もあると述べている。本研究の9月15日と18日に確認されたタカノツメの実に対するついでみ行動も、おそらく同一個体によるものであろう。その場合、この個体特有の行動であった可能性もあり、今後、他の個体もタカノツメの実を採食するのか観察例を増やす必要がある。さらに他の植物性の餌、特にタカノツメの実と同程度の大きさの他の植物の実に対する採食についても調べる必要がある。

本研究ではコルリ幼鳥雄が地上で活動する際に開いた尾を上下に激しく振る行動が確認された。青山(2024)で1例報告された同様な行動では、本種の雄成鳥が採食活動中に尾を大きく広げて地面を扇ぐように振ったことから、落葉の下等に隠れている昆虫等を追い出す機能がある可能性が示唆された。一方、本研究でも広げた尾を大きな振幅で激しく振る行動が2例観察された。1例目は青山(2024)で報告された例と似ていた。すなわち、1例目のタカノツメの実を啜える直前であったことから、落葉の陰にある実を見つけるのにつながったのかもしれない。ただし、尾を振る回数は少なかった。2例目は植栽部分から散策路に出る際に観察されたが、この行動は採食行動とは関連していなかった。今後、このような尾を広げて振る行

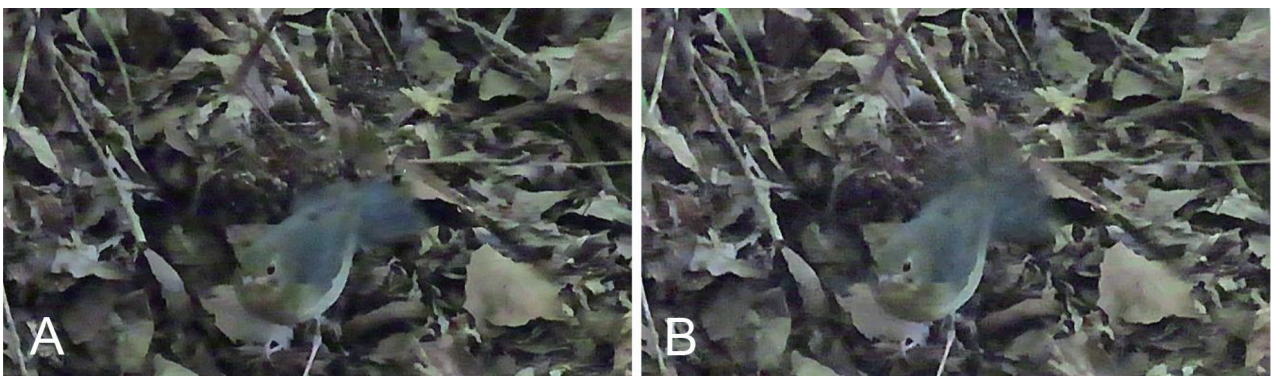


図3 尾をいっぱい広げて振るコルリ幼鳥雄。A: 広げた尾を振る中で尾が下がった; B: 広げた尾が上がった。

動についてもより観察例を増やし、何らかの機能と関係するの  
かさらに調べたい。

## 謝 辞

本研究をまとめるにあたり、樹木名のご教示をいただいた日  
本野鳥の会ひょうごの福本誠氏、気温のデータをご提供いた  
だいた神戸市立森林植物園の職員の方々、および原稿のご  
校閲をいただいた元神戸市立須磨海浜水族園 学芸員の土  
井敏男博士に深く感謝する。

## 利益相反

本研究を実施するにあたり、特定企業との利害関係はあり  
ません。

## 引用文献

- 青山 茂 (2024) 渡りの時期に神戸市周辺で観察されたコルリの行  
動. 兵庫生物, 16, 7–12.
- Clarke, R. H., Carter, M., Swann, G. and Herrod, A. (2016) A record  
of the Siberian Blue Robin *Larvivora cyane* at Ashmore Reef off  
north-western Australia, April 2012. *Australian Field  
Ornithology*, 33, 41–43.
- Deshmukh, P. (2011) First record of Siberian Blue Robin *Luscinia  
cyane* from Nagpur, central India. *Indian Birds*, 7, 111.
- Foster, K. (2006) Siberian Blue Robin at Minsmere: new to Britain.  
*British Birds*, 99, 517–520.
- Gassah, R. and Ismavel, V. A. (2019) Siberian Blue Robin *Larvivora  
cyane* from the Barak Valley of Assam with a status update for  
India. *Indian Birds*, 15, 123–125.
- 兵庫県環境部自然鳥獣共生課 (2013) 兵庫県版レッドリスト  
2013(鳥類).  
[https://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/jp/environment/leg\\_240/leg\\_289/leg\\_710](https://www.kankyo.pref.hyogo.lg.jp/jp/environment/leg_240/leg_289/leg_710). (参照 2024-05-28)
- 叶内拓哉 (2017) フィールド図鑑日本の野鳥 第2版. 文一総合出  
版, 東京.
- 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄 (2011) 山溪ハンディ図鑑 7 増  
補改訂新版 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京.
- 北野光良 (1999) 新・神戸の自然シリーズ 2 神戸の野鳥. 神戸市体  
育協会, 神戸.

- 北沢宗大・青木大輔 (2018) 北海道における長期積雪期のコルリ  
*Luscinia cyane* の記録. 日本鳥学会誌, 67, 267–270.
- 清棲幸保 (1952) 日本鳥類大図鑑I. 講談社, 東京.
- Mohsanin, S., Dymond, N., Khan, T. and Pierce, A. J. (2014) First  
records of Siberian Blue Robin *Luscinia cyane* for Bangladesh.  
*Birding ASIA*, 22, 114–115.
- 中村登流・中村雅彦 (1995) 原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編). 保  
育社, 大坂.
- 日本鳥学会 (2023) 日本鳥類目録改訂第 8 版和名・学名リスト公  
開.  
<https://ornithology.jp/iinkai/mokuroku/index.html#20230930>.  
(参照 2024-05-28)
- Rountree, F. R. G. (1977) Siberian Blue Robin: new to Europe. *Brit.  
Birds*, 70, 361–365.
- 佐藤重徳・岡井義明 (2007) 四国西南部の篠山におけるコルリの幼  
鳥の観察例. 四国自然史科学研究, 4, 38–40.
- 宋楡鈞・高章・何敬杰 (1983) コルリの繁殖生態. 野生生物, 3, 1–2.
- 高野伸二 (2007) フィールドガイド日本の野鳥. 増補改訂版. 日本野  
鳥の会, 東京.
- 田村 實・上田恵介 (2001) コルリの繁殖生態. *Strix*, 19, 11–20.
- 山階芳麿 (1941) 日本の鳥類と其の生態第二巻. 岩波書店, 東京.

## Abstract

Behavior of a juvenile male Siberian Blue Robin, *Larvivora  
cyane*, was video-recorded for seven days, a total duration of  
44 minutes, on the ground in September 2023 in Kobe city,  
Hyogo Prefecture, Japan. On replaying the record, the bird was  
observed to use its bill 153 times. In these, the bird pecked at  
something 139 times and removed fallen leaves 14 times.  
Although the pecked objects were hardly recognizable, the bird  
held *Evodiopanax innovans* fruit in its bill four times, and  
pecked at the fruit once during rapid walking. The fruits  
disappeared immediately, suggesting that the bird fed on them.  
*Larvivora cyane* has been reported to be insectivorous in  
general. The present study suggests that *L. cyane* also performs  
frugivorous foraging, although this was observed for perhaps  
in only one individual. In other recorded behaviors, the bird sat  
motionless on a branch lying on the ground; the maximum  
duration of 204 seconds. The bird also frequently wagged its  
narrow or slightly opened tail, up and down, and occasionally  
vigorously wagged its outstretched tail.

**Keywords:** *Evodiopanax innovans*, foraging, *Larvivora cyane*,  
video recording.